

## 「2018年インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学大学院文学研究科修士課程1年 外賀葵

私がこのプログラムに参加するにあたり、目標にしたことは次の2点です。1点目は、とりわけ非アラブ圏のイスラム文化の諸相に触れることによって、異文化理解に対してこれまで以上に視野を広く持てるようになることであり、2点目は、日本語学習者との交流の中で、日本語教育に関して新たな気付きを持ち帰ってくることでした。プログラムを終えた今、これらの目標は概ね達成できたと感じています。

本プログラムは大きく分けて5つの要素から構成されていました。語学研修、授業見学、文化体験、共同発表及び学外研修です。2週間という限られた時間の中で、これら全てを受講・体験できたことは非常に貴重な経験であったと日々実感しています。とりわけ、学外研修、語学研修、共同発表においては、参加前の目標に対して価値ある刺激を大いにもたらしてくれました。

学外研修は、1点目の目標に関して有意義なものでした。インドネシアの様々な民族の伝統文化に触れたり、イスラム教寺院のモスクを訪れ、実際にお祈りしている人々の様子を見学することができました。非アラブ圏のイスラム文化は、アラブ圏のイスラム文化に比べると多少厳格さに欠けたり、多様な変化を経たものであるのだらうと予測していましたが、必ずしもそうではない人々もたくさんいると分かり、改めて多様性を認識しました。その多様性の中で人々がともに暮らしていくためには、細かなルールよりもマナーやモラルのほうがより重要とみなされているのではないかと感じました。

語学研修は、インドネシア語の習得と2点目の目標に関して有意義なものでした。言語の習得については、日本での会話教室の段階から積極的に取り組み、現地でワンフレーズでも多くインドネシア語を使おうという気持ちを持って授業に臨みました。おかげで、片言とはいえ、インドネシア語で質問したり、買い物や友達との連絡をすることができるようになりました。また現地の学生との交流の中で、語学の授業の復習を兼ねて、間違いを恐れずにインドネシア語を使用したことで、授業では習わなかった表現等も身につけることができました。日本語教育の観点については、語学の授業の在り方について考えを深めることができました。先生方の授業の進め方、立ち居振る舞いには、これまで日本で受けてきた語学の授業では感じられなかったような明るさ、絶妙なテンポ、興味とやる気の引き出し方が感じられました。将来日本語教育の現場に立った際に、このような授業をしたいと思う授業ばかりでした。教師が教師のペースだけで進めるのではなく、受講生の立場を常に念頭に置きながらも、ゴールを見据えて、他の教師との連携も取りつつ、的確に引率していくことが必要なのだと感じました。

共同発表は、2点目の目標に関してたいへん有意義なものでした。バディであるインドネシア大学の学生と2人で1チームとなり、プレゼンテーションを一から作りました。テーマ設定の話し合いから思うようにうまくまとまらず、苦戦しましたが、先生や他の学生からのアドバイスも受けつつ、何よりバディとたくさんコンタクトを取り話し合いを重ねることで、何とか形にすることができました。2人で力を合わせて発表を成し遂げられたことで得られたこの達成感は、今後何かの機会に自分を後押ししてくれるものの一つになったと実感しています。バディとの話し合い及び共同発表は、九分九厘日本語で行いましたが、バディの日本語の表現を文法的に正しい表現にしたり、より日本語らしい表現にする過程で、日本語教育の難しさに度々ぶつかりました。特に、どうしてこのような言い方をするのかと問われた際には、うまく答えることができず、もどかしい思いを抱えました。しかし、このような質問を受けることは、将来日本語教育に携わっていきたく考える私にとっては、貴重な財産です。自身が考えたことのない視点から日本語を見つめなおす機会を得られました。

今回のプログラムで得られたつながりを今回限りのものにしてしまうのではなく、今後も大事につなぎ、つながり続けていきたいと思えます。